

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520283

研究課題名（和文）

17世紀書籍観と人文主義修辞学とからみた『愛のエンブレム』における思索強制の研究

研究課題名（英文）

Thought-enforced Conventions in Otto van Veen's *Amorum Emblemata*: Reading and Humanist Rhetoric Tradition in the Seventeenth Century.

研究代表者

鈴木 繁夫 (SHIGEO SUZUKI)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：50162946

研究成果の概要（和文）：

欧米の研究者によって不明とされてきた『愛のエンブレム』の典拠を数多く発見し、またそのラテン語の英訳の数多くの誤訳を指摘し、エンブレム情報の総合サイトに反映されることになった。またこの本を完訳させ、各エンブレムのメッセージと類似する同時代の絵画作品を発掘した。この作品は、フェーンによる古典からの出典を別文脈に移す「置き換え」というよりも、意図的に創造的改変を加えた「書き加え」であることを突き止め、論文として国際学会で発表を行い、国際学術誌への掲載が決まった。

研究成果の概要（英文）：

Otto van Veen's *Amorum Emblemata* has references to classical literature, many of which are unidentified yet today. The book was published in a polyglot format by means of which Veen is thought to sell his book well. My research discloses most of those unknown resources and set the stage for a dramatic change in Veen's website run by University of Utrecht. As for the polyglot format, the research reveals that it is one of the three contrivances Veen embedded in his book so that his readers must not assume that the text should be already possessed of its definitive message, but they must be responsible for deliberately and even enthusiastically participating in the process of making meaning.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学

キーワード：エンブレム・オットー・ファン・フェーン・読者反応論・17世紀・著者論・恋愛・結婚愛

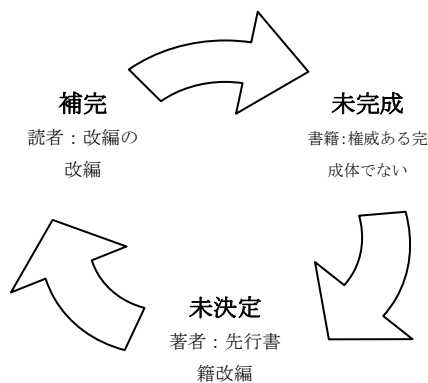
1. 研究開始当初の背景

読者とは、完成された一冊を本にこめられている著者の主張を歪めることなく再現する主体だと、現在では一般には考えられている。しかし印刷文化が定着し中産階級読者層

が誕生した16-17世紀西ヨーロッパ社会には、現在とは異なった著作観、著者観、読者像があったのではないかという仮説に至った。その仮説とは、一冊の本は未完成(non-finito)、著者は著作の内容や意味を支配する決定的

主権者ではなく (non-definito) ひとつの主張を開陳する存在、読者はその未完部分を自らの思考によって補完する (supplementare) 存在として定立されていたのではないかという決定未決の連鎖である。

こうした仮説を立てた背景には 16-17 世紀人文主義修辭学の考え方に立つならば、同じテキストを利用しながら、その意味内容をまるでカメレオンのように A だ、B だ、いや C だといったように次々と紡ぎ出す作法が正統とされていたからだ。著作はあらかじめ決定された意味内容を含むものとしては認知されているとすれば、このような多義性を考える余地はなかった。多義性の余地は著者が著作内容を決定する最終審級でなかったことも裏書きする。かといって読者は、著者の意図・著作の意味内容を最終的に決める決定権を所有しているわけではない。なぜなら読者の主張は他の読者により多義性の渦の中に落とし込まれるからだ。



こうした決定未決は、過去の事象 (著者・著作) を今現在において正確に表象することを目指す歴史本主義批評で取り扱うには自ずと限界がある。ところが 1980 年代から積極的に展開されるようになった読者受容論に立つなら、「作品には内在的意味はない」(Jonathan Culler, 1981)、「たんなる受容から批判的理解へ」(H. R. Jauss, 1982) といったことばが示すように、決定未決について積極的に評価し、それを人間が行う読書行為全般という普遍的枠組みの中で位置づけることができる。

翻って、未完成・未決定・補完という特質が 17 世紀の<書籍>世界にあり、それを自覚的に利用する著者がおり、著作が実際にあるとするなら、それはまさに近代読者の誕生を告げるものとなる。17 世紀に出版されたオットー・ファン・フェーン『愛の神アモルたちのエンブレム集』[以下『愛のエンブレム』と略記]にもそのような特質に従って解釈できるのではないかと着想した。

2. 研究の目的

近代読者というものを意識して『愛のエンブレム』が制作されたとするならば、少なくとも以下の二点が解明されなくてはならない。

- (1) 『愛のエンブレム』には、未完成・未決定・補完という三つの特質があること。
- (2) これらの三つの特質が作品に顕れるように、フェーンが自覚的にどのような形体を作品中に埋め込んだのか。

これら二点を解明するために、具体的に次の三点を明らかにする必要がある。

- (3) 作品中 (テキスト) のギリシア・ローマ文学 (ウル・テキスト) への言及は、テキストの文脈とどれだけ整合性があるのか。整合性がなければいほど、また整合性がないテキストの数多ければ多いほど、ウル・テキストは未完成であったことが強く意識されていたことがわかる。
- (4) 多言語版 (ラテン語と各国語) の解説詩のうち、各国語の解説詩がラテン語解説詩を正しく訳した翻訳となっておらず、意図的に改変されていること。またその数が 1, 2 にとどまらず三桁にもおよぶこと。改変の度合いが高ければ高いほどまた例が多ければ多いほど、テキストの未決定性の程度が高く、また読者による補完への要求度も連動して高いことになる。
- (5) 作品冒頭におかれた長文の献辞・序において、フェーンが著者の資格をアモル神に自ら譲渡し、また献辞者もそれを肯定しているが、これは単なるフェーンの謙遜あるいは矜持ではなく、ちょうどフェーンがアモル神の靈感を受けて古典に意図的に創造的改変を加える能動的主体となるように、読者も靈感を受けて能動的主体となることを正統なことであることを教えている。こうした意図があるとすれば、三特質の作詩論 (ポエティクス) が作品に生きていたことになる。

これら三点をきちんと詰めることで、上記 (1) と (2) は解明されることになる。これが本研究の目的である。

ただし『愛のエンブレム』の読者の観点から言い換えるなら、読者は図絵と解説詩の意味を思考し、その典拠を調べ、自ら古典 (ウル・テキスト) とフェーンのテキストに書き加えることを強いられていることになる。作者フェーンによる誘導は、読者に対する抑圧的ともいってよい要請ということになる。古典の伝統から切り離され、16-17 世紀の人文主義修辭学の素養がなく、時間をかけた理解よりも即時理解が好まれる 21 世紀に読者に

とって、この種の意図的な強制はこの本を遠ざける要因になり得ることが浮かび上がってくる。

3. 研究の方法

(1) 『愛のエンブレム』の初版を渉猟し、作者が著作の独自の形式によって読者を思考へと駆り立てる「強制性」がハード・ファクトとしてあったことを調査するために、初版本を所蔵し、またフェーンの改ざん本やフェーンの亜流本を所蔵するユトレヒト大学古文書館およびグラスゴー大学古文書館で資料収集を行った。

(2) ユトレヒト大学では「ユトレヒト・エンブレム計画」の推進者であり、17世紀に出版された愛のエンブレム集について国際シンポジウム主催したEls Strongs博士と、意見交換を行った。

(3) Wolfgang Iserによって提唱された読者反応理論を踏まえて、著者は自らの主張に正当性をもたせるために、自分よりも上位の権威と自己同一化させる構造があり、権威主義的な「強制性」がどれほど強度をもったものであるかを明らかにするために、Iser理論を発展させたStanley Fishの読者・著者論に関する一連の著作、またStephen Dobranskiによる読者・著者・書籍を巻き込んだ創作論を渉猟した。

(4) 124枚に及ぶエンブレム一枚一枚についてギリシア・ローマ文学(ウル・テキスト)への原典とその引用箇所を正確に探り当てるために、古典テキストのデータベース化(テキスト本文だけではなく作品内容と当該箇所の文脈も含む)を行った。これによって上記<研究の目的>中の(3)の未完性度を明らかにした。

(5) 多言語版(ラテン語と各国語)の解説詩のうち、ラテン語と英語の解説詩を124マイのエンブレムすべてにわたり邦訳した。これによって、上記<研究の目的>中の(4)の未決定・補完度を明らかにした。

(6) (4)および(5)の成果を基盤として論文にし、国際学会(International Conference on Literature, Languages & Linguistics)において発表し、欧米圏の学者からの批評を受け、三特質という着想そのものが誤っていないことを確認し、またそれがエンブレム文学全体においてどれだけ普遍的であるのかを意見交換した。

なお英文の校閲をMark Weeks(名古屋大学大学院・准教授)に依頼し、内容の正確な表現に努めた。

4. 研究成果

ファン・フェーン『愛のエンブレム』の読

者は、図絵と解説詩の意味について吟味し、エンブレムの典拠を調べ、エンブレムに自らのテキストに書き加えるようにフェーンは仕掛けていることが明らかになった。

(1) 解明の過程で、「典拠」について、これまで欧米の研究者によって不明とされてきたものを数多く発見した。この成果の一部をエンブレム情報の総合サイトの責任者であるストロンクス博士と面談し報告した。あわせて「解説詩」の英文訳について誤訳が多出していることも指摘し、サイトに反映されることになった。

(2) 『愛のエンブレム』を完訳させ(2011年2月完了)、各エンブレムのメッセージと類似する同時代の絵画作品を発掘した。「解説詩」はフェーンによる古典からの出典に意図的に創造的改変を加えた「書き加え」というよりも、古典などの材源を別文脈に移す「置き換え」であることを突き止めた。

(3) 英語解説詩がラテン語解説詩を正しく訳した翻訳となっておらず、意図的に改変されていること、しかもその数がほとんどすべてであることを明らかにした。ただしここにおいては「書き加え」レベルだが、フランスの詩人フランソワ・ヘルミは『愛のエンブレム』に白紙を入れ再製本し、白紙部分に自作のソネットを書き、文字通り「置き換え」を行っていることを明示的に示した。これらの点についても博士に報告し、エンブレム形式をとった日本の『首姫鏡』(1775)の方が「書き加え」として機能していることを指摘したところ、大変な興味を示された。なおこれらの成果内容はWebページに掲載した。

(4) 古典に意図的に創造的改変を加える能動的主体たれというフェーンの作詩論(ポエティクス)は、従来のエンブレム集とは異なっていることがあぶり出されきた。エンブレム集では著者が秘匿した綺想を、読者が読み解くという形体にあって、読者は綺想を創造した著者に対して受動的な主体でしかなかった。フェーンはこうしたエンブレムの形体を破る革新的詩人と新たに位置づけられる。

以上の解明は、英米の学者にとってきわめて斬新な指摘と受け止められ、この分野で最も権威ある雑誌エンブレマティカへの拙論の掲載が、発表直後に決定するという快挙となった。

なお今後の展望として、現代読者にとっての『愛のエンブレム』の位置づけを考えている。著者による読者への意図的強要が、抑圧する権力として作動しつつ、最終的には読者の自発的思考を活性化させるゆえに、当初の抑圧を裏切るような効果をもたらすことを導く。それは、21世紀の文化多元文脈における共生を支える価値基準(①自発的思考による選択、②社会共有財の使用の自由、③対人関係との意思疎通の向上)に抵触せず、自己

充足的安逸感覚にひびを入れており、現代読者にすらも対話可能性へと開示させる刺激剤となりうると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鈴木繁夫、反転する著者と読者：オットー・ファン・フェーン『愛の神アモルたちのエンブレム』における表象実践、『名古屋大学言語文化論集』、査読無、33 巻第 1 号(2011 年)、pp. 75-98

〔学会発表〕(計 1 件)

鈴木繁夫、Devious Communication in Otto van Veen's *Amorum Emblemata* (1607)、International Conference on Literature, Languages & Linguistics, 2011 年 7 月 12 日、Titania Hotel (Athens, Greece)

〔その他〕

ホームページ

<http://geosk.info/EmblemStudies/Veen.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 繁夫 (SUZUKI SHIGEO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：50162946

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし